

「ウイルスに克つ！」習近平国家主席は、人民戦争という言葉を使って、防疫に臨む強い国家意思を示した。戦争と聞いただけで、ネガティブかつアレルギー反応を起こす日本と比べると羨ましい限りだ。防疫は、国家の安全保障問題だからだ。

2月20日現在、TVでは「いつか見た光景」が再現され、「これまでの批判」ばかりで不安を煽り、「これからどうして、どんな準備が必要か」にはあまり言及されない。

各局御用達の専門家が、安全な場所でも無責任に評論する、その「いつか見た光景」とは、福島原発事故報道のそれである。放射線やウイルスという目に見えない脅威は、人を不安に駆り立て、混乱させる。混乱とパニックこそ、敵の思うつぼだ。

時間の問題と言われて久しい高病原性鳥インフルエンザの防疫対策は万全？ はずなのに、新型コロナウイルスにビビるほど、日本の防疫計画は役立たずだったのか？

日本は今、未知の敵を迎え、イレギュラーに変化する事態に対し、法令と人権に寄り添って真摯に対応している。この期に及んで、チャーター機で自国民を連れ帰り、軍事基地で再隔離する国々から批判される道理はない。非常時でも人権に寄り添い、個人情報に配慮する国は日本だけだ。しかし、しかしである、防疫という戦争ではその配慮が命取りとなる。

日本の防疫計画・実践に一番足りないのは、まさに「人民戦争の意識」だ。人権を度外視し、

人民戦争に学ぶ

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

軍事基地で隔離する国がうらやましい。超法規的措置を連発し、封鎖と隔離を強制できる国がうらやましい。強制収用どころか財産権をはく奪して、どんどん病院や隔離施設を増やせる国もうらやましい。「まさか、そんな事態は起こらないだろうか？」そんな国民の意識と政治家の体たらくが、日本の防衛と防疫を蝕み、最悪を想定する準備から目を背けてきた。一元化された指揮統制こそ、防疫の要諦であり、防衛と同レベルのコントロールが不可欠だ。「戦争は悲惨だ」「ウイルスは恐いね」そんな感傷や反省では、脅威を完封することはできない。

残念ながら、数千人を隔離する環境がないことがわかった。すぐ造るべきだ。狭い国土を考えれば、空母・医療船でもいい。隔離専用の医療島を造る手もある。

歪な縦割の国内法令に加え、国際法の不備もあった。これでは未入国の外国人にはなす術もない。錨を下ろさせた以上、下船させ軍事施設に隔離すべきだ。

何より、国民自身が私権の制限や強いられる不自由を受け入れ、明日からでもインフラ投資の防疫税を納める覚悟を極めることが先決だ。

その覚悟もなく、政府を批判するだけでは何の解決にもならず、数カ月後、ウイルスの終息とともに再び、関心も準備もお蔵入りになるだけだ。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に「概説戦後学校教育」「武徳教育のすすめ」。



美楽での連載を束ねた百念撰集
「雲涯蒼天」
定価 700円
Amazonにて販売中